村田春海は江戸の商人にて歌人なる村田春道の子なり、通稱を平四郎、號を琴後翁、錦織齋などいふ、常に學を好みて兄春郷と共に加茂眞淵の門に入りぬ、歌文家のきこえ高し、琴後集、歌がたり、假字拾要等の著書あり

江戸文集

椿まうでの記

村田春海

去年の秋、都にまうのぼりけるに、今年正月のつごもりの日、都の内をべて殘るかたなく燒けて、かりそめの旅居もやすからねば、伊勢の國白子の里に、村田の橋彦とて、おのが近きゆかりなるがもとをとひ來て、こゝに日數をなむ送りける、橋彦ぞ子なりける並樹といへるは、みやび人にて、なにくれと古き跡などとひ求むる事をしも好みけり、一日おのれにかたらく、この白子の里より西なる方に、はるかにいと高う見ゆる山あり、かしこに椿の明神しやくだいとなもいふ神なむおはすなる、その高しにしも、古き跡は殘れり、あはれ見せまほしうてそ、おのれさいつあたりにしも、歌がたり假年わけのぼりぬとて語る、きゝも及ばぬ事ども多かり、例の野山ふみわくるすさみのとゞめ難くて、いざ道しるべしたまへなどいひそゝのかして、ささらぎはつか九日の日門出す、ずさなどはなくて、たゞ二人ともなひ出づ、橋彦はしばしのほどの別をしみけるにや、庭の櫻の枝を折り

205058-000-6

41-93

江戸文集

〔出版事項不明〕

EDV-0051

まだきは、早くなり古今集に我袖にまだき時雨のふりぬるは君が心に秋やきぬらむとわり

遠山まゆは遠山のさま人の眉のやうに見ゆる意なり

とうでゝは取り出でゝなり

て、

山路ゆく君とゞめよとわがやどの花こそまだきさきそめにけれ

かへし、

ちぎりおきて我見はやさむ櫻花歸り來むまは散らずもあらなむ

といひすてゝゆく、里ぎはたち離るれば、春の海しづかに晴れて、松のあらしもうちかすめるに、遠山まゆの、かつ見え、かつ隱れたる、繪にかゝまはしき朝なり、火打とうでゝ烟うち吹きて、いにしへ今の事ども、あひ語らひつゝ、來し方の今はるかなるも、えおぼえず、神戸の驛を過ぎて、かひ川を渡る、此川にそひて、山の邊村あり、すてし高き岡のもとに、山の邊の御井の跡なりとてあるを、たちよりて見れば、かたはら皆田に作りなして、わづかに井とおぼしくてあり、今は水もあせて、たゞ老木の松の枝、ふたつにわかれたるが、一本なむたてりける、万葉集に此山の邊の御井の事見えたるを、賀茂の翁は、此山の邊村なるにゝあらで、いすゞの神宮の邊にありつらむといはれたり、今並樹が言を聞くに、本居のぬしの考へたるは、此山の邊村なるが、古の跡なるべしといへりとぞ、そのゆゑよし

かみあがりましつは、身まかり給ひぬといふに同じ

目路のかぎりは見やる限なり

かた〳〵は此處彼處なり

をきくに、いとことわりあるやうにおぼゆれど、こと長ければこゝには もらしつ、石藥師のなかばより、道を西北の方にとりて、廣き野に出づ、此野を鳴の長明が歌には、いづみ野といひ、烏丸光廣卿の歌に、まりが野ともよみ給へり、今は廣瀬てふ村のあるより、廣瀬野ともいへり、又のぼ野ともいへるは、いと古き名の傳はれるにて、古事記にも日本紀にも、日本武の尊の、能褒野にて、かみあがりましつと記せるは、此野をいへるにな むゆき〳〵てうちのぞむに、たゞ目路のかぎり、小松どものたちならびて、いづこを限ともえわかず、ゆくての道のへは、桃櫻などかた〳〵にはころびて、菫いと多う咲きたり、しばしこゝにて草をむしろにやすらはゝやなどいひて、並樹

見るたびにゆかしさそはる菫草つまではいかで野邊を過ぐべき

牛ひきつれたる柴人のあまたかよふなるに、桃櫻など手毎にとりてぞゆく、

さく花を手ごとにとりて賤の男もこゝろありげに見ゆる野邊哉

午の時すぐるころに、たけびてふ處に出づ、松のむらたちたる中に、白鳥

ひつぎは、ひとときにてひとは人きはおくつきのきに同じ棺をいふ

よこなまれるは、わろくなまりたるなり

ろはは、山の傍の嶮岨なる處なり

の陵なりとて、わづかなる塚とおぼしきが、木だちなどうち茂りたるあり、前には鳥居をたてたり、こはいにしへの跡とも、えおぼえぬよなどいへば、並樹がげにさる事なり、こは近き世に五天といへる法師の、こゝを白鳥の陵なりとはさだめつるなり、昔は鳥居もなく、たゞたけび塚といへりとなむ、此野には塚こゝ多けれ、車塚二子塚ひよ鳥塚などいふが、此近きはとりにもあれど、陵ならむとおぼしきはあらず、いづれ此大野の中に、彼陵はありぬべきを、年經て今はさだかにも知られぬにこそ、又かの、西の方に、高き山をのゝぼりとなむいふなる、山のかみつ方に、大きなる、石のひつぎのあらはれ出でたる處ありといへり、のゝぼりは、のぼりをよこなまれるにて、これなむ陵なるべきやなどいふ人もありとぞ、かくうち語らふほどに時うつりぬ、しやくだいじに詣でゝ、とく椿の御社にこそゆかめとて急ぐ、山近くなるほどに、道やゝさかしうおぼゆ、あるはのぼりあるは下りて、御熱川を渡る、しばし松のたち並たる陰を過ぐれば、山路いと廣く黑き岩ども、こゝかしこにみだれたてり、あゆみ苦しなどいひて、しばしこゝにやすらひぬ、さてそはの陰をつたひゆくに、道

いと狹し、谷ふところ深う見わたせば、ながれゆく川水は、はなだの布引きたらむやうにて、瀬々の波石にふれて、白う打けぶり、とゞろ〳〵となりとよめるこゑは、高嶺の松にひゞきわひぬ、はるかむかひなる山には、岩むらごとに、赤き花の見ゆるは、つゝじにこそあらめ、ほど遠ければ、さだかにはわかたず、谷すこしめぐれば、こなたの山にうひて、かのしやくだいじなむおはすなる、こゝををぎすとぞいふなる、はるかにあふぎ見るに、いとも〳〵おほきなる石にておはすなるが、たゞにひろごりたち給ひたるさま、かたはらなる高嶺どもと、あらそひそびえて、面きこと、いくそばくともおもひはかり難し、そのしきいませる根ざしのわたりは、目路もかすむばかり廣し、このふもとの田長どもの、ひでりうち續く時は、こゝにむらがり來りて、歌うたひ笛ふきなどして、この御心をなぐさめまつれば、雨必ず降りくるとなむ、そも〳〵しやくだいじとは、いかなるいはれぞととふに、昔より文字には石大神と書き來れり、さるは古くは石のおほかみともとなへたてまつりつらむか、延喜式に鈴鹿郡石神社と見えたるは、これをいふにやと並樹いへり、日かたぶきぬるまゝに、も

と來し道を下りて、御熱川より北の山あひを經て山本村に至る、こゝなむ椿の御社なりける、即式には鈴鹿郡椿太神社と見えたり、日くれぬれば、御社へは、え詣でず、此御社のはふり、山本行道がもとをとゝ、行道いと心ある人にて、あるじまうけなど、まめやかにせり、夜いと寒ければ、埋火のもとによりそひて、古き跡の事ども物語す、夜ふくるまゝに、軒の松、聲たてゝ、おらしはげしう吹き出でたり、

式には、延喜式には

はふりは、神官なり祝部と書く

あしびきの山松がねの假まくらあらし吹く夜はいこそねられね

並樹

世のほかのこゝろこそすれまれに來てやどる軒端の松風のおと

たど〳〵しは安全ならぬをいふ源氏物語に夕やみは道たど〳〵し月待ちて歸れ我せこ其間にも見むとあり

朔日つとめておき出づ、よべより、雨いたう降りたるゆ、なほをやむべくもあらねど、とく御社に詣でゝ、たち歸らばやなどいひあへり、あるじの、此雨にはいかでか歸らせ給ふべき、山のそは道たど〳〵しかるべし、今日はやすらひて、明日なむたち歸らせ給へなどいへば、さらばとておもひとゞまりぬ、ひるますぐるほどに、雨やゝ晴れぬれば、御社に詣づ、行道も道しるべせむとてともなふ、森の内いとかう〳〵しく見わたされたり、年ふりたる木だちどもの、枝さしかゝして茂りあひたるが、さと吹き來る風にさそはれて、露みだれ散りつゝ、衣手ぬれとほりぬ、御社の前に至れば、かなたこなたに、いと陰ふりたる椿の花、白きと赤きがあまたたてり、たちよりて見るに、椿の木のさましたる葉の、枝ごとに生ひ出でたり、こはいかなる種ぞと問へば、此御社の前なるは、皆かゝる葉の生ひ出づめり、こを昔よりあやつばきとぞいふなる、又このうしろなる高巖をつばきごのだけともいひ、なべてこのほとりに、椿いと多しとなむいふ、又此御社は、何の神のいはゝれ給ふにかといへば、猿田彦の大神なりとぞ、やごていがきのもとにぬかづきて、

衣手は、袖に同じ

いがきは、みづがきともいふ神社の周圍の垣なり

はふりこごいはふみむろのあや椿とはつ神代にうゑしたねかも

行道がいへらく、此近きあたりに、いにしへ大寺のあまたありつるが、今は皆跡絶えたり、其寺々の名などは、むかし聞きおきしかど、今は忘れぬ、佛のみかたなどは、なほかた〳〵に殘れり、いざとて森の内たち離れて、すこし北へゆけば、軒かたぶきて、柱など朽ちたる庵あり、入りて見れば、いと古き藥師のみかた、ひとつなむおはするが、蜘の巣などかきたりて、

みかたは、御形なり

かきたりて

かきたるは、やがて誤にかきたるなれば、かかるかたくなしきことはなり、詞の垂れたるなれば、とかくいふに同じ

ことゝ處は、他所の義あり

花供ずべき皿だになし、かたはらにあやしげなる唐櫃四あり、蓋おし開きて經文とり出でたるを、卷々くりかへし見るに、あるは永德あるは康曆あるは明德などいふ年の名を記して、又書ける人とおぼしく、妙通聖周妙香などいふ名を記せり、又人の名も年月も記さゞるあり、こは後に補ひ寫したるなりと見ゆ、すべて大般若經になむありける、こゝには卷の數五百あまりありて、猶殘れる卷どもは、高宮の青蓮寺にありとなむ、古き佛のみかた、こと處になほあまたあり、ともなひゆきて見せまゐらせむといへど、雨降り來ぬれば、えゆかず、今宵又行道がもとに來りてね、二日、日はさし出でながら、風はげしう吹きて、いと寒し、椿が嶽より、すべてたちあらびたる峰ども、夜のまに雪白う降りたり、山あひうち過ぎて、いづみ野に出づ、さくらの花ども、かた〴〵にさき匂ひたるが、ふきくる山風にみだれあひたり、

をちかたやつばきが嶽の朝風にさくらふきまくいづみ野のはら

高宮てふ所をすぎて、庄野の驛に出づ、なかばすきかへしたる田面に、びりのあがりたるを見て、並樹

あらを田は荒田といふに同じ

加藤千蔭は幕府の家人にて歌人なる芳宣園加藤又兵衛枝直の子なり通稱を又左衛門號をうけらぞのといふ、眞淵の門に入り歌文をよくす、萬葉集略解うけらが花等の著書あり又書道の達人にて千字文古今集序新百人一首等の墨帖は世に重んせらる

あらを田のおのが古巢を賤の男にうちかへされてなく雲雀かな

暮近きほどに歸りつきぬ、この白子の里より椿の御社まで、道のほど今の五里にあまれりとなむいふ、

天明七年三月

香取日記

加藤千蔭

香取のかたより海上かけて、ゆきて見むとて、平春海とともに出でたちぬるは、卯月の十日あまり八日の日になむありける、よべ源のみつるより直節にあつらへて、せうそこせり、近きわたりより舟出して、かの文を開き見れば、げにもおもひたちぬるにこそ、かいのしづくも笘もる月も、いかばかりみやびたる旅寢ならまし、おもへどもとか、こよひだにまうづべきを、えさらぬなりはひにかゝづらひて、心にもあらぬなめげさよ、さるは、

利根川のみをさしくだし夏ぞひくうながみかけて君はゆくかも

かしまがた岩間がくれのしら玉もひかり知るべき人やまつらむ

みをい船路とある水すぢをいふ萬葉集十五に、しほはまちてみをもきゆけばとあり

夏ろひくうながみは夏麻引にてうなかみの枕詞なり

うながみは下總の郡なり海上と書く

かしまは常陸の郡なり鹿島と書く

田ねは萬葉集十にたづがねの聞ゆる田ねにいはりしてとあり

舟はてゝは舟つきてなり

なぜいとこまやかなり、ぬひ子がもとよりもおひつきて、

夏ろひくうながみがたに君ゆかばわれも玉藻にならましものを

となむいひおこせける、其外にもこれかれありつれど、もらせり、小なぎ川を漕ぎゆく、そのかみはこゝも田ねにて、苗代の小なぎが花とよみし水草もや生ひたりけむ、今はひだりみぎりに家居たちなみて、舟ぎほふ川とぞなりにける、下つふさの葛飾の入江に舟はてゝ、やはたといふ處をゆくに、麥のはなみ色づきわたりて、苗代小田に蛙こゝら鳴く、そこにうしはきいます神のみやしろにて、去年の春大鐘の埋れたりしを、堀り出でたりと聞けば、入りて見る、こはさきに、雨岡のこのわたり旅ゆきし日記にくはしければ記さず、鎌が谷の驛までは、松檜原篠おぞ生ひ茂りて、うつきところ〳〵に生ひたれど、花はいまだ咲き出でず、やはたと鎌が谷のあはひにて、道ぶみたがへて、鬼越といふ所へ出づ、中山寺とて、いと大きなる寺あるを、入りてこゝかしこ見ありく、老いたる法師に道を問へば、堂のかたはらの坂をのぼりてよと、をしふるまゝにのぼりゆけば、いとしづけき山路にて、ふみまよへりしも、なか〳〵なり、夕さりつかた繰が谷に至りて宿る、

うしはきいますは領しいますなり萬葉集五に神つまりうしはきいますとあり

ひなわくは鹿の胸にて野をわけゆくをいふ萬葉集八にさをしかのむなわけにかも秋萩のとあり

はらばふは服を地につけて這ふをいふ

十九日、昨日にも似ず空かきくもれり、かの驛をゆきつくして、いと廣き荒野に出づ、えげみぞ中をのみわけ來し目には、驚かるゝばかりにあむ、こゝかしこに駒どもあさりをり、はるかに鹿のむれゆくも見えて、いとめづらし、千草の秋おもひやらるゝ野原なり、春海

ま萩原まだうらわかしゆく鹿のむなわくばかりいつかなりなむ

千蔭

かつしかや野べのさをしか聲たてゝ妻とふ秋はわれもとひ見む

赤駒のはらばふ田ねを今日見れば家路とはくもおもほゆるかな

其野をいる〳〵ゆきすぎて、白石といふ山路をすぐ、こゝは小松いと多く、谷の清水きよらにて、都近くは子の日にとはまほしき處のさまなり、道もせに蕨おひ出でたれど、今は老いて折るべくもなし、そこを過ぎて白井より木れろしの岸へゆくに、近き道ありと教ふる人のありて、かめなりといふへ出づ、左に手が沼とて大きなる沼あり、潮ならぬ海ともいひつべし、細く長き堤をゆき〳〵て木おろしの川べに至る、此川も利根

ねびれては年老いてなり

すくよかならぬは、すくくと丈夫ならぬをいふ

けがしきは汚穢なるをいふ萬葉集五にむぐらふのけがしき宿にとあり

ひさろけては除き去りてなり

の下つ瀬にて、ふたまたに分れて流るゝなりけり、そこより舟に乘るころ、雨ふり出でぬ、笘すこしひきあげて見れば、左の岸は楸のねびれて、すくよかならぬが、どころ〳〵にたてり、右は田畑にて、はるかに杉たてる山々など見えわたりてをかし、漕ぎゆくほど、日もやゝ暮れなむとするに、雨しきりに降りて、笘のしづくもたゞならず、春海

風をいたみ雨雲まよふなみのうへによるべも知らぬ利根の川舟

千蔭

川ふねのとまもる雨を月かげになしてもろでにやどしてしかな

直節

いとゞーくわびしかりけりかぢ枕雨さへそゝぐとまのしづくに

なぞわびあへるに、かく雨風あらくては、夜舟漕ぐべうもなし、神崎に舟よせなむと舟人いふ、神崎のもりは、いと木深く鬱々しく見ゆ、香取郡左原といふ處の躬國がもとへとおもへど、雨もよに道たど〳〵しかるべければとて、そこのいとけがしき小屋に宿る、夏としもなく北の風寒し、廿日、朝雨やみたれば、舟の笘ひきうけて乘る、風はなはやまず、やゝゆく

ほとゝぎす云々は拾遺集二に郭公をちかへりなけうなゐ子がうちたれがみのさみだれのそらとあり

かにはためになり

ねせきい水をせきとめたる所をいふ

まつるは奉るみつぎは御調なり

ほど、また降りいでにけりとおもはるゝは、舟のへにあたれる涙のちりかゝるにてぞあなる、からうじて躬國が家の前へ舟よせぬ、躬國いでむかへり、雄風も出でゝ待ちわびたりとて、

ほとゝぎすをちかへり鳴けはやせ川漕ぎゆく君が舟よするかに

となむよめりしどぞいふ、畫すぐるほどより、又雨降り出でぬ、其夜躬國がもとに宿れり、躬國雄風心しらひありて、家もあらなくにといひし旅とはことにて、何くれと物かたらひうちして、をかしき夜のさまなり、歌かきてよと乞ふまゝに、春海

もろともに家路わすれてかたる夜は草のまくらと何かおもはむ

千蔭

利根川に來よる白浪しば〳〵もとはまくほしきやどりなりけり

廿一日、雨おほやまず、日ひと日題を探りて歌よむ、水鶏の鳴くを、春海

おのづからねせきをもるゝ澤水の聲にこたへて鳴くくひなかな

鶏つかふわざを見る、千蔭

玉川の鶏かひがわざはわが君にまつる日なみのみつぎなりけり

人々のは、こともものにかいつけつ、夕さりつかた雨やみたり、

廿二日、朝より雨ふり出で、晝より雨風いとはげし、今日も題を探りて歌よむ、さらび、春海

春のいろはおもひわすれし夏かげにしきを見する花ぞこの花

年經てあへる、

年月に思ひわたりしこゝろをばまづあみだこそ知らせそめぬれ

千蔭

見し世にはあらずなれども語らへば心ぞもとのこゝろなりけり

事しげきうき世の人に見よとかも咲き出でぬらむくちなしの花

女すのもとにたちてほとゝぎすをきく、

ほとゝぎす聲なつかしく聞ゆるは思ふかたより鳴きて來ぬらし

さて人々のぞ來て乞ふまゝに、いろ〳〵の紙に手ならひして日を暮しつ、其夜雨風なほやまず、浪の音がしかましくて、いねもやられず、夜あけて見れば、高き梢どもをれなどせしもあはれなり、

かしかましくいかしましくに同じ

つゞらをりなる山に、つゞらといふ草を折りたるやうにまがりたる山をいふ

神さびたるは神々しく尊きをいふ

日をとはみは日が遠き故にあり

おひては追風なり

舟はてしは舟つきしなり舟のゆきつきて泊るをはてはつといふ

廿三日、朝雨やみて風なほはげし、今日なむ躬國雄風案内して、香取郡五峰の山といひて、松いと茂くて、つゞらをりなる坂をのぼりくだりて、香取の御社に至る、いと神さびたる宮ゐのさまあり、津の宮の岸より、船にて常陸なる鹿島が崎へわたりて、海上かたへゆかむとおもへど、風あらくて渡さむことかたしと舟人いふ、躬國雄風もしひてとゞめて、雄風酒肴もて來て、其岸の小屋にいこひて別をしむ時に、雄風

利根川の岸のたち浪たちかへりくる日をとほみわかれかねつも

といひ出せりければ、かへしに、

みをたえぬ利根の川舟いくそたびゆきかよひてか君とかたらむ

ろこよりたち別れて、津の宮丁子今市など、かちよりゆきて、をみ川にいたる、酉の時ばかり西の風たちて、おひてよければ、舟に乘りて、海上の節之が家のかたはらへ舟はてしは、其夜の酉すぐるほどなりけり、節之がもとに宿りぬ、

廿四日、空はれて風もなし、節之あないして、濱邊のけしき見にゆかむとて、うちつれゆく、飯沼の觀世音に詣づ、小松生ひつゞきたる山にて、左は

いさごは石子の義にて砂をいふ

わた中には海中になり

ともづなは船をつなぎとむる綱をいふ

つらゝにはつらなりてといふに同じ

崖なり、崖の下つかたは、飯沼飯見根などいへる村々にて、田の面は畜代せり、其村々うちこして、利根川の下つ瀬見ゆ、こなたは飯沼につゞきて、和田山といへる山なり、松木深く生ひ茂れり、和田山の尾は木だちもなく、いさごのみにて海にさし出でたり、其尾をすこし離れて、わた中に一の島二の島三の島ととなへて、大きなるいはほたてり、むかひは常陸の國の波崎なり、かぎりなき大海の浪こゝにつどひ來て、かの波崎にうちよせ、あるは三のいゝほにあたりて、かつ碎け、かつこえゆくさま、絵にかゝまほし、このころの雨風につなぎのれし大船ども、あまたともづなとき て、つらゝにうかび出でたる帆かげなど、いとおもしろくて、たとへいはむかたなし、春海

海上のおきつやしほぢくもきえてうらわの千ふね朝びらきせり

雪とちり雲とみだれてよせ來つゝいそもとゆする沖つしらなみ

この波崎を今はさきとなふれど、もとはなみさきなめり、攝津國のたかつをも、後にかうづとよこなまれるたぐひなるべし、わかぬものかち、夕つかたより黒雄おりゆきて物など書きて、日暮れて節之がり宿る、

よがれは夜ゆかぬをいふ詞花集にいづかたもよがるゝこゝとのわりなきにふたつに別る我身ともがなとあり

をちゆは遠方よりなり

潮さゐには潮騒になり萬葉一に潮さゐにいらごの島べとあり

見のあしくは見ることのあしくなり

間のかしてくは聞ゆることのかし

古雄春齋などとひ來て、題をさぐりて歌よむ、いはでおもふ、春海

ことに出でゝいひも盡さむものならば人に心をもらさざらめや

一夜へだてたる千陰

なれぬれば一夜ばかりのよがれにもあけゆく程を待わびにけり

其夜は、かの沖浪のけしき、わすれがたくて、いをねぬまゝに長歌作れり、

なつそひく海上潟の、飯沼の岡にのぼりて、見わたせば常陸の國と、しもつふさの中に流るゝ、利根川は川とはしろみ、みをはやみ千里のをちゆ、おちたぎちながれ來につゝ、ひんがしのみうらのきゝみ、たゝへだる大海原の、潮さゐにいゆきむかひて、あらそへば沖浪高し、其浪は雪かも降れる、さ綿かもつかねてあると、見るがうちに千尋百尋、しろたへの布はへしごと、ひろごりてより來るさまは、天雲に乘りて空ゆく、わたつみの龍とふ神か、其海のありうの崎に、島なしてたてるいはほに、さく浪は千々にくだけて、うらに飛び雹とみだれ、其岩を越えゆく波は、ましろなる駒か走ると、おもふまで見のあやしく、其音の聞のかしこく、天地のそくへの波を、ひとかたにつどへてよする、これの波

こくなり
そくへはろ
きへともい
ふ萬葉三に
天雲のそく
へのきはみ
とあり

みなわは水
泡なり

いくゝすり
は不老不死
の藥なり拾
遺集かめ山
にいくゝす
りのみあり
ければといい
むるかたも
おき別かお
とあり

かごかなる
處は靜なる
處なり

崎、

反歌

ひさかたのみうらにつゞく汐路より寄來る波を今日見つるかも

廿五日、空晴れたり、近きわたりの磯べより山べに至りて、古き寺々見あるく、畫すぐるころより田護のもとへ、よばれていたりて、人々題をとりて歌よむ、夏日を、千蔭

昨日今日照日かしこしさ苗とる田つらのみおわぬるみゆくまで

夏祝を、春海

夏狩のさちある宿と見ゆるかないくゝすりをも世々につたへて

これ其家に藥をひさげばなり、其夜も節之がり宿る、

廿六日、朝晴れつるが、晝よりくもりわたりて風はげし、惟堅政孝正慶なゞとひく、夕つかた節之あるじして、荒野村のかごかなる處につゞへり、寶滿寺堅賀大德は、千枝子の親族なれば、ことにむつみて、物たづさへて來て、これかれともに題をさぐりて歌よむ、なでしこの花さきそめたるを、

春海

朝にけに
は朝毎にあり
萬葉三に青
山の峰の白
雲朝にけに
とあり

みくさは水
草なり

おほけなし
は堪へ難し
といふに同
じ

しかすがに
はさすがに
といふに同
じ

かつ〳〵もさきそめしよりとなつに匂はむ花は朝にけに見む

釣殿に螢の飛ぶを見て、千蔭

つりどのは涼しかりけりほたるとぶみくさの露を袖にかけつゝ

荒野村にいはひまつれるは、味耜高彦根の神にまし〳〵て、白幡の宮と申しまつれり、其御社に額てふものもなければ、書きてよと田護がこひぬれど、額など書かむは、いとおほけなしとて、いなみつれど、ゆるさず、おのれさきに夢みしことあり、いづことも知らず、ふりたる社の前にいたれるに、そこにありつる翁に問へば、白幡の大神と申すと答ふ、おのれぬかづきて、歌よみて、たてまつれりとおぼえて、夢さめつ、其歌はいかゞよみけむ、ゝすれつ、其夢他人に語らむも、あとなしごとにて、人わらへなればもだしをりき、さかすゞに其神の御名は忘れざりければ、みそかに心にかけて、さる神やおはすると、人にも問ひ、みづからも尋ねしこともありき、さるをかゝる神おはして、ことに其御社の御名書きてよと人のいふも、くしきことにしあれば、いかで書きて奉らむとれもひなりて、手あらひなどして、ゐやまひ書きて、田護にあたへつ、さて夢の歌は忘れつれ

こむまごは子孫なり
みてぐらは御幣なり

ふみ〻書に踏をいひかけたり
うべはむべともいふ蔓帥なり郁子と書く
うべしこそに郁子をいひかけたり

ば、せむかたなくて、今なむよみてたてまつる、

あづま路の國安かれとうながみにえづまりいますしらはたの宮

こむまごを守りまさなむうながみの宮ゐにたてる松のときはに

と書きて、みてぐらしろにたてまつれり、

廿七日、堅賀大德の寺へ招かる、ふりたる松、こもりかにたちなみて、堂のさま、いとつぎ〳〵し、例の人々と、ともに歌よむ、帶を、春海

かりうめにとけしはなだの帶もうしむすびもあへぬ契と思へば

書を、千蔭

信濃路や木曾のかけ橋ふみみずはかしこかる世の事を知らめや

其夜なは節之がり宿れり、

廿八日、正慶がり招かる、家ゐをかしく住みなし、庭に年ふりたる松ありて、うべはひかふれり、春海

松蔭に根はふかつらのうべしこそ千歳をこめし宿にはありけれ

香取の伊能美之も海上へ來りて、はじめて對面す、美之い、もと江戸の山川喜寛が子にて、いと若かりしはゞに、香取へ來りて、人の家をつぎつる

よし語る、秋になりなば、江戸へ出で〻物問はむなどいへり、其夜も節之がり宿りたるに、美之より春海のもとへ消息す、文のはしに、

ふるさとをおもへばおなじ武藏野の草葉の露をあはれとい見よ

とて、おのれへもことづてせり、春海かへし

今はとてたちわかるとも武藏野の草のゆかりをわすれましやは

其父喜寛い、歌このみて、おのれ若かりし時、對面せしこともあれば、たゞならずおぼえて、そのたよりに歌よみてやる、

かりがねのとわたる秋を今よりはまちやわびなむみよしの〻里

廿九日、朝くもれり、節之今日船出して、まづ江戸に至り、うれより都へおもむきなむとす、おのれも春海も、其船に乘りて歸らむとて、節之が家の前の岸より、ともに舟に乘る、人々磯におりたちて、おくりす、今日は風も吹かで、川の面平らかなり、申の時ばかり常陸の息栖の御社を拜みつ〻ゆく、こ〻は今いきすといへど、古くはおきすとなへしとなむ、このわたりは川づらいと廣く、うこより鹿島潟かけて、十あまりの島々ありてちひさき家ども、ところ〴〵に見ゆ、これらもいにしへは洲にてやあり

つちむ、大海もやゝ近ければ、沖洲といふなるべし、夕つかた西の空はれわたり、入日かゞやきて、平らかにひろらなる水の面に匂ひ、たゞむかへる香取わたりも、すぎ來し海上の方も、雲ゐに見ゆるさま、いとをかし、暮すぐるころ鹿島の大舟津に舟はつ、暗くなりにたれば、御社は明日拜みてむとて、岸なる家に宿る、

わくれば五月のついたち、空はれたり、つとめて鹿島の神宮に詣づ、御社のさま、いと神々しく、木高き松杉は、いくばくの年を經にけむ、いとふりにふりて、さるをかせ枝に垂れたり、こゝら紅の花の見ゆるは、につゝじなりけり、なは春れば、ねて、さかりなり、春海

あられふりかしまが崎のいはひ杉いはひろめしは神の御代かも

千蔭

かしまねに神さびたてる松ゞ枝の日かげのかづらかけて幾世ぞ

宮ゐの前より、やゝくだりて、みたらしあり、みぎり深き常滑に、清水いときよからにすめり、かたゞ〳〵見めぐりて、また大舟津より舟にて潮來の小川をのぼる、此川も利根川の下つ瀬の分れて流るゝなり、其中にいく

さるをかせは苔の類なり

につゝじは丹躑躅と書く萬葉六に

につゝじの匂はむ時の櫻花とあられふりはかしまの枕詞

つともなく、あじろの床をかまへ、床の前に簀をたてゝ、すの中にて大きなるさでして、ちひさき魚をとる、いさり人は小舟にて通ふとおぼしく、て、床のしりへに舟つなげり、

利根川やあじろのとこにひと夜ねて涙にいざよふ月を見てしぞ

氷魚は冬のみよるめれば、うゑ田上なぞのあじろは、川風さむきをりなるを、こゝはいつといふ時もなしとぞ、川そひの新ばりに早苗青みわたれり、常陸には田をころ作れと歌ひつゝゆく、うし堀といふ處にて、しばしいこひ、神崎へ漕ぎのぼるころ、日暮れぬ、同じくそこに舟よせし人は、香取より江戸へのぼる人にて、伊能景明とて、はやくより歌など數へつる、いね子が兄なるを、其人とも知らでありつるが、何くれとかたらひぬ、木おろしの早瀬をさかのぼれば、舟いとおそし、誰も〳〵笘ひきかつきて、ふしつるほど、川中にて夜あけたり、舟人おりたちて網手引のぼる、郭公はいかなることにか、門出せし日より聞かず、ことに海上のかたは、いと稀なりとて、一聲をだに聞かざりしを、こゝにてはじめて、さやかに鳴きわたるをきゝて、

新ばりは新にはりたる田をいふ

さでは網の類なり

清水濱臣は江戸の醫者にて通稱を玄長といひ號を泊舍といふ村田の春海の門に入り頗る語林類葉抄字造語據月詣和歌集標註泊酒文集泊酒筆話等の著書あり

こがれゆく利根の川原のはやき瀬に聲もよどまぬほとゝぎす哉

木おろしの岸よりあがりて、大森白井などを經て、八幡に至る、中川をのぼらむは、夜をこめてたよりわろしとて、市川を渡り、關をすぎてゆくほどに、日暮れぬ、たどる〳〵さかゐの渡りに至りて、舟に乘りて、二日の夜の亥の時ばかりに歸りつきぬ、後のれもひ出ぐさにとてなむ、

寛政六年五月

琴後集序

清水濱臣

世に歌よむ人多し、あるはみじか歌にたくみに、あるは長歌にかしこくあるは文かくわざにすぐる、世にいにしへまなびする人多し、あるは御世々々の書をあきらめ、あるは四のおきてふみにくはしく、あるはわがれる世のふることふみに心をふかめ、あるは後の世の物語ふみをまくらことゝす、其人々に問へば、彼にくはしきは、此におろかに、こゝにおもひ入りたるは、かしこに心あさし、玄かのみならず、やまとさうしのうへには、くちさきらきゝたるも、もろこしふみにむかへば爪くいるゝたぐ

四のおきてふみは律令格式をいふたれやし人かはゝ誰かはといふに同じ武烈紀にたれやし人もあひおもはなくにとあり

ひ多し、まことそれもことわり、たれやし人かは、皆がら兼ね備へたるあらむ、我家の佛たふとぶにはなけれど、うまく此道々にゆきとはりて、よろづたど〳〵しからぬは、ひとり我師錦織舍の翁のみなむおはしける、翁こゝの事はすべて縣居のうじに問ひ聞かれたるよし、誰もよく知れることなれば、いはじ、もろこしまなびは、はじめ服部仲英ぬしに名簿おくられしを、仲英ぬし身まかられては、鵜殿士寧ぬしに從ひ、中ごろ都にのぼりて、皆川伯恭ぬしに問ひ聞かれしこと多く、又後にゝ佐々木學儒安達文仲などいへる世にすぐれたる博士たちに、あしたゆふべむつびともなはれしかば、からうたにも其名聞えて、なま〳〵の博士口あかすまじくなむおゝしける、翁世にもとむる心なくして、やんごとなきおまへわたりに、めさるゝこと好まれず、たゞ花にあくがれ、月にうかるゝ外には、朝夕文机のもと去らずおはして、筆とるわざにのみあかし暮されしかど、ともすれば物まなびする人のためにさまたげられ、かくすれば病の床におきふしゝて、おもふことといはでやまれたること少からず、かささして事終へられざりしもの、數あまたなりき、歌をのみたてゝもの

せられしとにはあらねど、おのづからこのかたにて世に知られ人に用ひられつゝ、やう〳〵天の下、たかきもみじかきも、老いたるも若きも、知る知らぬ歌よむ人とだにいへば、千陰春海と口にいはざるものなきやうにはなりおはしにけり、其歌のすがた、芳宣園のをぢは、いきはひをゝしく詞はなやきたるを好まれ、翁はさびたるさまのこまかにしめやかなるふしを心とせられにけり、文詞はおもむきをもろこしにかり、ことばをこゝにうつし、古言をもとめず、さとび言をはぶき、あたらしくひとつのさまをおもひかまへられて、わきてめでたくなむものせられける、世の人翁をたゞに歌よみとのみおもはむも、翁を知らぬなるべく、又たゞに上つ代の學するたぐひとのみおもはむも、翁を知らぬなるべく、又たゞにから學のはかせなみにのみおもはむも、翁を知らぬなるべし、翁若くしてなりはひの道にうとく、遂に家をはふらかして、百千のたからを失ひ、はては事たらぬがちに年月を送られしかど、老いて後言の葉に富みまなびに富まれたり、いでや百千のたからは、たゞしばしいけるがはどの富なり、言の葉と學とは、とこしへになきあとまでの富あり、翁たからに貧しくおはせしかど、言の葉と學とに富まれたり、まことに天の下のたからの王とは、翁をこそいふべけれ、誰かはうらやまざらむ、誰かは羨はざらむ、今此言の葉のふみ、世にあまねくひろごりて、あひだおかず、學のふみども板にゑられゆかば、わが翁を天の下のたからの王なりといふ事の僞ならぬこと知られぬべし、ろも〳〵此集の名におふせられたる琴後の詞ゝ、神功紀に琴かみ琴しりといふ詞のあるより、おもひよられたるなりとぞ、

はなやきたるは源氏物語に女房なども數知らず集ひ參りて今めかしう花やき給へりとあり

はふらかしは古今集誹諧に身はすてつ心をだにもはふらさじつひにはいかゝあるべくとあり

あひだおかずは間もなくといふに同じ

よせはてにたりは心を寄せたるなり

文化十年閏十一月

春花秋葉優劣辨

この八とせばかりのむかし、白川少將殿のおほせことうけたまはりて、人々と共に月花のおとりまさり、さだめいへることありき、そのをりおのれ何くれとあげつらひいひもてゆけるおくに「花やあらぬ雪やあはれとおもはえぬ心ひとつを月にすまして」とて、つひに月によせはてにたり、しかるに此たびまた花紅葉のおとりまさりさだめばやといふつ

はじは漆の木の一種にて黄櫨と書く

ぞひあり、そも〳〵春の花は梅あり櫻あり桃あり梨あり、藤あり、つゝじあり、何かは色ならぬ、されど中昔よりこのかた、花といへば必ず櫻に限ることゝなれり、秋の紅葉はたしかに、はゝゝうあり、はじあり、ぬるてあり、かへてあり、柿あり蔦あり、いづれかは句はしからぬ、かゝれど今の世にもみぢといへるも、うちまかせてはかへてなり、春の花のいろ〳〵に咲きまじりたる園生、秋の紅葉のとり〳〵に匂ひかはせる林こそ、春秋の錦、目もあやに心うつりて、おとりまさりいひきり難からめ、櫻とかへてとをとり出でゝ、たくらべたらむにい、櫻にかたひく人多かるべし、かくて額田の姫みこの御心には、たがふとも、おのれは春の花をこのかみにたとへて、秋の紅葉をば、おとゝになずらへばやとなむおもはるゝ、かのさきのあげつらひには、月にかたひけるも、今日のさだめには花に心よせぬめり、そは時にうつる心かろさにはあらず、もとより月は花にまさり、紅葉は花に劣りたりとおもふが故なればなり、

累物語

高田與清

高田與清は村田春海の門人にして水松屋と號す、烈公の命によりて文藻百十二洲の文を撰す、夜日記殘日記馬日抄鹿島日記漫筆松屋集等の歌文著書あり、廣く諸書を渉獵し、考證に長じ、頗る家藏書の累の聞えあり、高新著聞集、祐天大僧正傳、近世奇跡考、等に見えたり、死靈解脱物語、と、て二卷あれ

今はむかし、下總國岡田郡羽生村の百性に、與右衛門といふやもをありけり、同じ郡の横曾根村に住めるやもめの、男兒一人もたりしを、むかへとりて妻としけるが、其兒が顔かたち見にくゝて、世にたとへむかたなきかたはものなりければ、與右衛門あはめ憎むこと限なし、此兒あらむには、妻をもさりてむとむつかりければ、妻おもひわづらひて、慶長十七年といふ年の四月十九日に、このわらはをゐてゆきて、絹川のへの横堀へうちはめて殺してけり、わらはが年は六にて、名をば助となむいひける、與右衛門その殺しゝにめでゝ、ふたゝびいふことなく、むつまじくて過しけり、くるつ年に妻はらみて、女を生めり、そのかたち助につゆたがふことなきかたはものなるに、もゞさの重きにさへあひて、顔は干したる鬼たちばかなどのはだのやうにて、色は漆塗りたる如くに黑く、あくまでねぢけたる心たましひなりけり、それゞ名をば累といへり、世の人は助が重ねて生れ來しならむとて、あざなをかさねとぞよびける、さるかたは女なれど、與右衛門まことの子なりければ、憎しとも思はで、養ひおはしてけり、さて與右衛門夫婦のものどもも、世を去りて後、かさね一

どうきたる事多し此篇ハ高田氏の其地をすぐるをり親しく事實をきゝ古書を考へて記されたるものなり

やもをは妻無きをいふ

あはめは疎むをいふ

むつかりは腹たつるをいふ

うちはめては打込みてなり

くるつ年は翌年といふに同じ崇神紀に明年クルツトシとあり

もがさは疱瘡なり

人家に住みけり、そのころ六十六部廻國の經ひじりの、此里にさそらへ來て、ゆひなゞ業として居けるを、かさねが婿にせむとて、里人なかだちしけり、經ひじり、かさねがもたる七石ばかりの田畠におもひをかけて、かたはめをも厭はで婿になり、やゞて其名を與右衛門と改む、かくてしばし住みけるが、かさねが心のかたましく、かたちの見にくきを疎みはてゝ、いかで此女を殺して、よき妻をもたばやと思ひなりぬ、ころは承應二年八月十一日の事なるに、與右衛門妻のかさねをゞて、絹川のをちかたなるまめぶの豆を苅にゆきけり、さて妻に苅豆を重荷にしたゝめて脊負はせ、夫は輕荷に負ひて、日の暮に我家ざまへ歸るに、妻重荷に困じて、いかにわが夫はみづから輕荷負ひて、我にのみかく重荷おはせ給ふとくねりいひけるに、與右衛門いふやう、さばし念じてゆけ、川を渡りなば、我皆がら負ひてゆかむとすかしつゝ、招合のわたしを渡り、絹川の西の岸をのぼりに、飯沼の弘經寺のわたりを經て、羽生村にうつる、こゝに横堀のありけるに、あたりに人なきを見すまして、夫うしろより妻をつき落し、やゝあやまちしつやとて、つゞいて飛び入り、救ふさまにもてな

はだは皮なり

おほしては育ちてに同じ

經ひじりは桂川地藏記に六十六部回國之經聖負笈とあり

さゝらへは漂泊の義なり

ゆひは人に雇はるゝをいふ堀川百首に殘り田はそしろにすぎじあすはたゞゆひも雇はで早苗とりてむとあり

かたましくはねぢけたるをいふ

まめぶは豆田をいふ

し、目の中口の中へ砂をおし込めて、なじりごろしに殺してけり、こゝぞ助わらばが、母のために沈められし所なる、其時報恩寺の清右衛門といふもの、ゆきかゝりて柳かげに隱れ窺ひけるをば、與右衛門つゆばかりも知らざりけり、かくて與右衛門家に歸り、妻のかさねは、あやまりて水に溺れぬといひなし、羽生村の法藏寺にはうぶりて、歸眞理屋性貞信女永應二癸巳年八月十一日とありたる石塔をたてぬ、此始終をほゞ知るものありといへども、かさねがゆかり絶えてなかりければ、とかくいふことなくて止みにけり、與右衛門は本意とげて其家を押領し、心にかなへる妻をまた重ねけるが、いづれも子なくして世をはやうしけり、いと未にむかへたる妻、一人の女を生めり、これを菊と名づく、菊が十三になりける年、寛文十一年八月なかばばかりに、此母もまた身まかりぬ、此年の十二月ばかりに、與右衛門、後の妻の甥なりし金五郎といへるを婿にとりて、家をつがしめむとす、くるつ年正月より菊、病に犯されて例ならずわづらひけるが、廿三日に口より泡をはき、目を怒らして、父與右衛門をにらまへていふやう、我は二十年さきに、絹川のへにて、わぬしに殺

芝たゝめては作りてなり

くねりいひけるは恨みいふなり

なじり殺は攻め殺といふに同じ

くみあひ人は近所の人なり

あざみて驚きてなり

おとなは重立たる人をいふ

師は祐天僧正をいふこゝの文は祐天大僧正傳拾遺に見えたり

されしかさねなり、最後のありさまは、法恩寺村の清右衛門もよく知れり、そのうらみを報いむために來れりとて、さま〳〵に口ばしり罵りければ、與右衛門は恐れ惑ひて、いきたるこゝちなく、金五郎もまことの父の家に逃げ歸りて、ふたゝび頭をさし出さず、くみあひ人これをきゝあざみて、村のおとなに告げければ、名主の三郎左衛門、年寄の庄右衛門等あひはかりて、醫師陰陽師などやとひて、とかく心を盡せどもかひなしうのころ祐天僧正のまだ年二十六にて、弘教寺に遊學して居られしがこのよしを聞きて、法師たち二人三人ねておはして、經をよみ十念を授けなどしつゝ、教化したまへども、物のけなほたち離るゝさまなし、其時師、屋の外にたち出でゝ、そちをあふぎて、聲高らかによびてのたまはく、十切正覺の阿彌陀佛、天眼をもて見、天耳をもて聞け、それ五切思惟して超世の願を發していはく、極重惡人無他方便、唯稱名字必生我界と、今すでに應なくして誓願空し、靈山の世尊もまた聞け、六八の願をしめし、みづから勸證していはく、我見是利と、今すでに驗なし、これ何の利をか見る、恒沙の諸佛、舌相證明すともまことゝするにたらず、もしわがいふこ

たうびぬは賜ひぬなり

とみには俄になり

胸をきりては胸痛みてなり

うたへ申しは告げ申すあり

ふるおきなは顯宗紀に耆宿フルオキナとあり

と誤あらば、金剛神をして、我首をうち碎かしめよ、もしそれ稱名つひに功驗なからむには、我今より戒を破り俗に還り、外道を學びて佛法を滅ぼさむとぞのゝしり給ひける、さてもとの菊がふしたる枕べにて、念佛數千遍せられけるに、佛菩薩も納受やしたまひけむ、物のけたちまち去りて、菊が病はじめておこたりぬ、師やがてかさねが法名のもじを、うるはしく改めておくり給ひ、阿彌陀佛の名號のかたへに理屋照貞禪定尼寛文十二子年三月十日と書きて、菊にたうびぬ、これ今の世までも與右衛門が家に奉持する掛字なり、かくて菊が病癒えけるに、同じ年の四月十九日の朝に、とみに狂ひ出でて、胸をきりて惱むこと甚し、村人またさきの物のけのつきて、惱ますにこゝろと驚きあひて、師のもとへうたへ申しければ、師ふたゝび菊が家に來まして、枕べに居よりて、問ひたまはく、かさねの死靈は、すでに得脫して天上に生れぬ、今かく菊を惱ますは何ものぞとなじり問ひ給ひければ、息の下にて、助にてさふらふといらへけり、師里人をよびて、さるものありしやと問ひ給ふに、ふるおきなありて、答へていはく、むかしし〳〵の事にて、母が絹川に沈めて殺しゝよ

し聞きたゐちてさふらふ、其後雨のうぼふる夜などには、絹川のへにて、小童を見しものゝ候ふは、かれが鬼にて候ふべし、かさねが殺されけるも同じ所にて候へ、いかに悪縁深きものどもにてか候ふらむ、あな恐しく〳〵と舌を巻きて申しければ、師うちうなづかせ給ひて、やがて單到眞入といふ法名おほせ、十念を授け給ひければ、物のけたちまちに去りて菊が病なごりなく癒えぬ、さて後與右衛門も、あやまちを悔いて、頭おろし、西入といひて一心に念佛稱名し、延寶四年といふ年の六月廿三日に往生を遂ぐ、菊も尼にならむと請ひ申ゐしを、さてゝ父の家永く絶えなむずとて、師あなぐちにとゞめ給ひければ、せむすべなくて家をつぎて、子うまごあぐも出で來て後、享保十五といふ年の五月三日に、齢七十二にて身まかりぬ、石そとはに榮譽不生妙樂とゑり、過去帖に榮譽妙樂比丘尼享保十五戌の年五月三日と記したるはこれなりけり、松の屋のあるじが、こゝをすぐるをり、よめる歌、

はかなさを語りかさねてきぬ川の流れての世もかくしのぶらむ

石そとはは石塔なり

元政上人は洛陽石井道種の子にて幼名を俊といふ十三歳の時井伊直孝に仕へしかども多病にして郷里に歸りて後佛門に入りて日豊大僧都を師とし日政と改め又元政ともいふ泰

漁父辞

清水濱臣

秋吹く風に耳ろばたてゝ、故郷のすすきのなますおもひ出でけむ人こゝろ、けにさることゝはおぼゆれ、岸のひたひに老の波をたゝみて、すぐなる針に王公の位をつりえし翁は、うらやましくもあらずや、われはたゞ世を捨舟に棹さして、山かげのしづけく、水草の清からむあたりに、いきのをのかぎり心をやりて、うへおきたのしみとは、なしぬべきぞかし、

身延道の記

元政上人

母の願にて身延にまうでしころ、近江の國よりせうろこせし人のもとへ、

せめて世をのがれしかひの身延山すむらむ月をたづねてや見む

とおもふばかりになどいひつかはしける、雨うぼふる日、京より來て別をしみける人、

このわかれをしむたもとのしづくよりなほおきろふる深草の露

又或人のもとより、

堂妙子不可思議なる號す和漢の學に深く釋氏廿四孝本朝法華傳扶桑隱逸傳温泉遊草山草隱草山和歌集等著書甚多し

此篇は萬治二年の秋母を伴ひて身延の精舍にまうで江戸に遊ばれし道の記なり

身延は甲斐巨摩郡波木井の庄にて初篠夫と書きしを日蓮上人此地にうつりて身延に改めたりといふ

深草は山城

わかれゆく人をこゝろにおくらすは今日も逢見ぬ袖やぬれなむ

かへし

言の葉よいつわすられむゆく我をおくるこゝろの色と見ゆれば

此歌はまぎるゝ事多きこゝろにてやらす、便おらばことづてゝむ、人々の歌いと多くて、もらしつ、

八月十三日のつとめて、深草の庵を出づ、御いとまごひに霞の岡にのぼるに、霧たちわたりて、春よりもおぼつかなく、わはれ深き曙なり、御墓は道の草露さへしげく、昔物語おぼえて、いとかあしく目もきりて、歸る空も忘れぬべし、母は今年八十に今ひとつゞ足り給はぬ、御齡よりは若く見え給へど、立居かよわく、よろぼひ給ふを、人かたはらを離れず、かゝへたすけものすれば、ひなの長路におもむき給ふ心うさ、おもひやるべし、今宵は石邊にとゞまる、水わろき處にて苦し、聖教などおひて、三衣の袋をかけ、鉢を持ちたれば、おもひの外困じにたり、山を出づるより、道すがらおもひつゞけし事、灯のもとにふしあがら書きつく、

延山知甚處、携母奉辛勤、千里隨明月、一庵任白雲、入堂辭古佛、上墓別先君、日出出霞谷、黯然路未分、

紀伊郡にて元政上人退隱の地なり

御いとまごひは亡父の墓にまうでられしなり

霞の岡は深草寶塔寺の後東の方なり

昔物語は源氏須摩の卷をいふ

石部は近江甲賀郡にて江南六角家の旗頭三雲主馬助氏之てゝに在城せりといふ

聖教は佛經をいふ

三衣の袋は頭陀袋なり

山を出づるゝ深草の山を出づるな

大津にて雉子の、鳩のおはさなる、三ばかり籠の中にあるを見て、樊中に養はれむことを願はゞと、わはれにおぼえて、

西風吹我向江東、湖海霧收浸碧空、一鉢生涯水雲廣、可憐澤雉在樊中、

志賀の浦遠く見え渡るに、天智天皇の建福寺をたてゝ、みづから名なしの御指をきりて、燈幢の石壇にをさめ給ひし事、いともかしこくおもひつゞく、

滋賀故鄉過幾秋、水濱不答思悠々、君王斷指古壇下、泣血漣如洒望眸、

十四日足いたう痛みて、平松といふ處にて、俵つけたる馬雇ひて乘る、馬上吟

昨日發草庵、超然欲圖南、用之而不勤、我聞之老聃、不急亦不緩、我聞之瞿曇、一旦竭我力、不知其所堪、勃窣誠可笑、投杖策羸驂、磬母不盡志、有事每自慙、空手役君鉢、赤肩敬師擔、籃輿三四僕、暮山度山嵐、

鈴鹿山を越えて、

秋風のおとさへかはるすゞか山ふるさと今やとはくなるらむ

り

樊中には莊子に不靳畜樊中とあり靳は願、樊は籠、籠の中に養はるゝを願はずとなり

名なしの御指は第四の無名指なり事は元亨釋書二十一に見えたり燈幢は燈臺の類なり

平松は近江甲賀郡道より南の方に平松とて松林ありといふ

鈴鹿山は伊勢鈴鹿郡にあり

關は昔鈴鹿の關ありし

今日ハ關にとまりぬ、

透得利名關、不曾妨往還、忽々旅窓底、明月伴吾閑、

夜ふくるまゝに、破れたる窓のうち月すさまじく、風さへひやゝかにて、冬の夜のけしきなるに、母のいかにいねがてならむとおもふにも、今日鈴鹿山にて、昔なき人と、伊勢へまうで給ひし事、語り聞えて、鼻うちかみ給ひき、赤染衛門が旅は旅ともあらざりきといひし、おもひあはせて、あはれにいとかなし、

草まくら夢やは見ねむありしよの旅はたびともあらしふく夜に

とおもひつゞけて、ずてしまぢろみて起きぬ、

十五日夜いまだ深ければ、心靜にねんずうちして、母と御物語聞ゆるに鳥もしば〳〵鳴けば、出でたつ、月なほ高くすめり、温庭筠が商山の早行おもひ出づべし、關のうまやを離れて、大きなる河あり、關河といふ、口にまかせて、

關河如鎖月、清影曉猶清、宿鷺穿氷立、旅人蹈雪行、星稀天漸白、雲別路初明、不自曳黎杖、何由知此情、

處なれば關といふ逢坂不破鈴鹿これを王畿の三關といへり

いねがてはねがてなりなき人は亡父をいふ

旅は旅ともはありし世の旅は旅ともあらざりき獨露けき草枕かなと新古今集雜に出でたり

ねんずは念誦にて經文など唱へて觀念する義なり

温庭筠は晩唐の人なり才子傳八に少敏悟天才能走筆成萬

龜山をすぎて、松の中をゆく、興ある處なれば、詩つくらむといふに、例の事多き癖にて、こゝかしこ語るにまぎれたり、陽明子が我もまた天下多言の人なりといひし事、ふとおぼえてをかし、其默齋の說こそ忘られね、人詩つくりたりとて語れば、もよはされて、

行盡青羅步障中、松林夾路隔秋空、欲逢佳境言佳句、東話西談吟不濃、

石藥師をば西福寺といふ、瓦ふける堂うづだかし、

纔過庄野郵、有寺聳高樓、西福門前景、東方世界秋、百痾無自性、四大一浮漚、刻石藥師佛、此言須點頭、

桑名より舟に乘る、夕陽なほ殘れり、風靜に吹きて、二里ばかりも來ぬるに、遠き山の上に月あかくさし出でたり、今宵は十五夜なりけりと人々興じつゝ見るに、やゝて曇るやうにて、そや過ぐるほどに、又いとよく晴れて、波もひとつに見ゆ、來しかたもかゝる月は見ず、これより後もあらじといふに、人も皆いふめり、こゝなむ伊勢尾張のあはひなりといへば、

わすれめやいづくはあれど伊勢尾張月もこよひの秋のうなづら

ゆき〳〵て富士のみ雪にくらべ見むさらにたぐひもなみの月影

言とあり
商山は西安府の南にあり秦の四皓が隠れし處なり
早行は早朝の旅行をいふ
黙齋の説は梁仲用が求に應じて王陽明の述べられたるに文錄抄八に出でたり
うやは初夜なり源氏若紫の卷にろやいまだつとめ侍らずとあり
くひせ河は美濃安八郡株瀬川なり土俗呂久川といふ
ざれごと歌は誹諧歌をいふ
月の兎は韓非子に宋人有耕者田中有株兎走觸株云々の故事をよめり
宮は尾張愛知郡熱田宮の畧言なり
元賛は大明十三世神宗の萬曆十五年に生れし人にて此時七十三歳なりきとぞ
太祖は大明の太祖皇帝を申す

鳴の長明が、くひせ河にて今宵の月見し事おもひ出でゝ、ざれごと歌

こよひ見し人はくちにしくひせ河月のうさぎをたれまもるらむ

宮につきぬ、

西風七里片帆飄、波上飄々著熱田、邂逅相逢三五夜、超遙飛過九重天、仙山縹緲宋濂句、鯨海渺茫徐福船、吾孝不容携父骨、徘徊月下憶僧蓮、

夜なかばなるに、名古屋のゆかりのもとに門うちたゝきて入る、皆よろこびて、いねずなりにけり、

十六日、日たけて起く、今日はこゝに休みてといへば、つれ〴〵なぐさめにと明人元賛を呼ぶ、やがてきたりぬ、此國に年經て、ことばよくかよへり、いとめづらしき物語して、太祖の事おぼくづし出でたり、皇明通紀讀むてゝちす、我名を問ふを、元政といへば、我兄弟おりとたはふる、筆をとりて、

一仰高標愜素聞、不才尤愧共論文、從來四海皆兄弟、何必今朝初見君、

元賛と同じく金荔枝を題す、和韵なぞもあれど、しげゝれば例のもらしつ、

十七日、鳴海潟をゆくに、かもめのとびかふを見て、

いづくにも靜かある身のたぐひあれやかもめいさよふおきつ白波

八橋はゆかしけれど、さだかに教ふる人なし、このもかのものいづこならむと見わたす、菅原の孝標の女の記に、八橋は名のみして橋のかたもあく、何の見どころもなしと書ける、今はまいて跡をだに知る人なかるべし、矢矯の橋を渡るとて、心におもひしまゝに、

うき世には又ひかれじとあづさ弓やはぎの橋にかきつけて見む

道すがら乞兒にあしとらせて、

腰下青錢捨若塵、小甕何足救窮民、客衣常濕秋風淚、多洒路傍無告人、

十八日、夜深く岡崎を出でゝ、今日は白須賀につく、潮見坂にて作りし詩、

百尺斷崖開海門、坂頭直見怒潮奔、大聲轉地怪鯨吼、高浪捲天疑鶴飜、光景無邊亡晝夜、漁舟一葉割乾坤、千流萬派惣歸處、到此何人知水源、

十九日、荒井のわたりより、富士山を見て、

碧天雪白々雲間、走卒兒童亦仰顔、東海初遊多少客、富山不敢問何山、

天龍の渡の船に乗りて、まづ西行上人の事をおもふに、涙のつれなきに事どもくづ

し出でて聞ゆとあり

皇明通紀は大明世宗の時東莞の清淵居士陳建といふ博士太祖の創業より武宗の正德年中までの事を編述せし書なり

金荔枝は蔓草にて俗につるれいしといふ

いさよふはたゞよひやすらふをいふ

孝標の女の記は更科日記あり

天龍の渡は天中川ともいふ遠江豐田郡にて信濃諏訪湖の末といへり

西行上人の事は西行東へ下る時此渡にて人多く乘りて舟やうやうあやうけなりければ法師おりよ〳〵とて櫂もて打たれし事をいふ

いで我駒は萬葉集にいで我駒は早くゆきませまつち山まつらむ妹をはやゆきて見む」とあり

魯論は論語の事なり

それと見て云々論語子宰篇に顏淵喟然嘆曰仰

も、おのが心のほど知られて、かなしくくちをしき事いはむかたなし、

いにしへを去のばゝなどかこの川のみぎはまさりておちぬ涙そ、

今宵は見付といふ里にとゞまる、かの阿佛の尼、此里にとまりしに、里のあれて物おそろしかりければ、誰か來て見付の里と聞くからになどいひし事おもひ出でゝ、例のざれこと歌、

今は身の誰にかくさむこともなしみつけの里の名をもいとはじ、

二十日、あけはなれて見付を出づ、今日も馬に乘りけり、そなたのかたに雲おほひて、富士の山見えず、

よしさらばなか〳〵くもれ言の葉の見ても及ばぬふじの高嶺を

掛川のほとりにて母のこしおくれたれば、馬をとゞめて、

いで我駒くつもやれなはがけ川にしばし水かへおやも待つべく

佐夜の中山をかちよりゆく、こしをになへるをのこの、身延もはやはゞ近くなりぬといふをきゝて、

こえはてば今日ぞ尋ぬるかひがねもさやにや見えむさやの中山

今日は島田までといふに、御靈の奉行とやらむ多く泊りて、宿もなしといへば、金谷にとゞまる、日高ければ、茶など煮てうち休む、心のどかにて旅のやどりともおぼえず、今日富士の歌ふたつ、魯論のことばもてよめるといふを、人聞かばやといへば語る、其歌、

うれと見てあふげばうらにあさま〳〵いよ〳〵高しふじの白雪

山や知るふじのみ雪を見てもなほひとしからむと思ふこゝろは

廿一日、曉になりて、母の腹痛み給ふを、針藥おぼ、とかくしてよくなりぬ、日たけて金谷をたつ、大井川水あせて、かちより渡るも多し、岡部の里に杉の一むら見えたる、中務のみこの、岡部の里の杉の一むらとよみ給ひし昔ねぼえて心細し、

つゆしもの岡部のさとに秋を經てつれなくのこる杉のひとむら

うれよりかちにて、うつの山にかゝる、御靈をおくりて歸る人、道もさりあへず、らうぐはしき中をゆく、

夢にだにまだ見ぬ人はあまたあへど誰につげましうつの山ぶみ

途中吟

長途重夜冷方袍、漸覺清霜換鬢毛、翠靄消時溟海出、白雲斷處士峰高、襲

之彌高鑽之彌堅とあり山や知る云々論語里仁篇に子曰見賢思齊焉見不賢而内自省也とあり道もさりあへずは古今集に梓弓春の山べをとえくれば道もさりあへず花ぞちりけるとあり

うつの山ぶみは伊勢物語に修行者あひたり京に其人の御もとにとて文書きてつくとあるをいへり

何よけむは源氏帚木の卷にめざま

中末得江山助、馬上毎遭風景勞、昨日遙岑飛錫去、四頭寸碧似秋毫、

今宵は駿河の府中につく、

廿二日、江尻といふ處にて、なにがし甚左衛門といふものゝもとにて、身延の道問はせける、ねもごろに教へて、盃出して何よけむなどいへど、おのれ酒飲まねばかひなし、近ごろ感得せりとて、高祖の親筆の題目、同じく石に御諱までなるをとうでたり、まづあまたゝびぬかづきて、母のこしかき入れて、拜ませまゐらせ、人々にもいたゞかす、ゆくさきけはしき道なりといへば、明日のためとて、おきつにとゞまる、午の時ばかりなるべし、しばしやすめて清見寺にかき入れ、海見やらるゝ處にすゑて、心あるもなきも、皆ながめをれり、うれより濱に出でゝ、貝がらひろはせて御覽ず、旅宿に歸りて、夜ふけてねにけり、

一夜だにわがいはばらの清見潟こゝろとねぬるなみのまくらは

清見寺の詩もあれど、いとねふたし、後に書きつけてむ、

廿三日、曉深くおきて、戸あけて海べに出でたるに、ありあけの月、隈なくすみて、松原までさやかに見え渡る、

しきあるじならむとのたまへばなにによけむともうけたまはらずとあり

いはばらは盧原郡なり

またや見むは又見むや見られしとの意なり

つゞらをりつゞらは葛なり葛の蔓の如く折曲れる意なり

枕草子に近くて遠きもの鞍馬のつゞらをりとあり

福聚院は惠光禪師の開基にて臨濟派なり

とばかりは、

またや見む清見が關に夜をこめておきつの濱のありあけの月

おきつより、しゝ原といふ處まで四里ありといふ、其間道細く、つゞらをりなる坂をのぼりくだる、右のかたに澳津河流れたり、わたりてゆくに、ゆくさき皆山河にて、四十八瀨ありとかいふなる、しゝ原にて皆休む、民の小屋いたくいぶせければ、すてし心のべむと、うへなる寺にのぼる、福聚院といふなり、とばかりやすらひて出でぬ、うれより三里來て、萬澤といふ處にとまる、吉田のなにがしとかいひて、山家にては優なる家居なり、軒端の山幾重とも知らず、此里近く雨にあひて、衣の袖うちしほれたれば、燒火してあたる、家も雲の中なれば、びとひがたし、今日道すがら口にまかせたるを、書きつけて見る、

殘月送吾清見關、回頭猶見三穗邊、澳津浦口有石廟、金字刋成妙法蓮、一巷街茅占此處、道路從是分身延、路細石高草露深、往々民家薄籠烟、山上纔見富士雪、山下遠流澳津川、四十八瀨幾水石、行人揚厲涉潺湲、曲々巉嵒路高低、百步九折愁攀緣、路遠可騎支公馬、山險難著祖生鞭、坂頭高處忽擧目、士峰和雲落眼前、宍原村家少甚錫、福聚禪院値枯禪、昔日巨刹今

しばしといふに同じ

萬澤は駿甲の境にて萬澤遠江守君泰のをりとぞ

處なりとぞこれより甲斐巨摩郡に入る

西行坂は萬澤の内なり昔西行法師此處に蘆をむすびて駿河なる富士の烟のとふ歌をよまれしとぞ

松は坂の上にありて枝廣くはびこり根高くあらはれてまことに老木なりとぞ

南部これも巨摩郡なり

零落、開基勅諡惠光圓、可憐泥路収新稻、唯談農桑不論玄、呼杖下門逞顏色、長幼相羸吟鞍迹、兒童墜馬消吾魄、毎苦兒童馬上眠、行程七里屆萬澤、細雨班々濕客氈、振衣便入村主家、臨門問姓答吉田、解鞋洗足從意休、子母握手俱欣然、

廿四日、雨やまず、川も水ささらむといへば、なほとゞまる、いとつれ〴〵なれば、人々詩つくり歌よみて遊ぶ、

一雨瀟々萬澤秋、竹籃草屩暫淹留、平生詩友皆青眼、惆悵老親添白頭、山館日長須伏枕、溪流水漲不浮舟、旅窓靜處同鄉土、況是此行隨母遊、

廿五日、萬澤を出でゝ坂あり、馬おふものゝいはく、此坂を西行坂と申す、此松は西行の松と申すといふ、歌あどあらむとおもへど、問はむよしあし、南部といふ村に休みて、午のさがりに、ろてを出づ、村を離るれば、はや身延の高根も見ゆ、今三里なむありといふ、

懸崖廻復轉、偏信馬蹄痕、松老西行坂、雲深南部村、延山遙仰嶺、富水未知源、自此阻三里、一鞭到寺門、

申のさがりに身延につく、其山のさま、たとへばひえの山をひんがし坂

南部三郎光行の在城せし處にて後に穴山信友これによれりとぞ

清水坊は身延西谷に在る坊舍なり

伽藍は梵語にて寺院の義なり

御骨堂は弘安五年十月十三日日蓮上人武州池上にて遷化す其地にて

本よりのぼるこゝちすべし、すぎにし春のころ、夢に此山にまうでしに、おもかげやゝたがはず、このたびまうづべき瑞夢にやと、今ぞおもひ合せらる、清水坊といふに着きて、まづ燒火せさせて、今日の寒かりしも忘れたり、

廿六日、よべより雨降りて、昼のほど、すこし晴間ありける、このひまに諸堂拜まむとて、西谷より橋渡りてのぼる、山水の奇秀はさらにもいはず、伽藍の莊嚴奇麗、又いはむかたなし、ひとつ〴〵記さまほしけれど、みじかき筆の及ぶべきならねば、なか〳〵やみぬ、畫圖などには似るものあるを、あはれ繪かく人もがなと求むれども、かひなし、老僧二三人祖師堂の開帳す、御影拜み、ぢづかにねんずして、

一上延山心愈悲、俱生未法不逢師、手香頂禮影堂下、淚濕尼壇欲起遲、

それよりこなたかなためぐりて、御骨堂に參り拜み奉る、玉の寶塔の中に、いとあざやかなり、

なにゆゑにくだきし骨のなごりぞとおもへば袖に玉ぞ散りける

廿七日、奥の院へ參る、母はこしなれど、なほくるし、二十町ばかりのぼり

て、水飲といふ處より、道ことにけはしくて、たび〳〵休みて、からうじて着きぬ、八間四面の堂に、こゝにも御影ありて、いとたふとく拜み奉る、うしろに大きなる木あり、うのもとを堀りて、父の遺骨ををさめ、おのゝそりかみをもうづめぬ、あへてそこなひやぶらずといへるもおもひ出でゝ、つゝみ紙に書きつけたる歌、

いたづらに身をばやぶらで法のためわが黑髮をすてしうれしさ

高祖上人の、九年の間、日毎に此峰にのぼりて、房州の方をのぞみ、父母の御墓をこひしのび給ひし事、あはれにかたじけなし、

投身湯鏇極群毛、終向雲山深處逃、宗祖九年猶忍苦、吾儕一日豈辭勞、若研著海記鴻業、欲聚須彌爲兎毫、別有風敎可進慕、瞻望父母陟斯高、

時の間に雲うづみて、ゆく人の迹見えず、たどる〳〵くだりて、昨日殘りし所々拜みめぐる、丈六の佛い、中正院僧都の作なり、石のきざはし恐るばかりおりて、山門にのぼり、羅漢拜み、しばし高欄によりて眺望す、前に川漲、そのめぐり皆山なり、

火葬し遺骨を身延に納めしとなむ

あへてそこなひ云々は孝經に身體髮膚受之父母云々をいへり

房州の方は安房長狹郡東條庄小湊浦は日蓮上人の生れ給ひし地なり

雲うづみては本朝文粹紀齋名が賦に山遠雲埋行客迹云々

中正院は洛北妙顯寺中正院日護佛像を刻むに巧なりきと

甲陽延嶽秀東闢、重疊奇峰雲裏開、飛閣高臨溪水聲、層巒遠逐殿堂環、若非靈鷲金仙洞、定是天台銀地山、今代文章孫綽後、何人賦得到人間、

石のきざはしは石階二百八十七段高さ五十八間なりとぞ

うつぶさい駿河盧原郡内房なり

廿八日、身延を出づる、道より雨降り出でたり、鎌倉池上などへ參るべきにて、今日はうつぶさまでゆかむといへど、道わろくて馬人進まねば、萬澤にとゞまる、

廿九日、つとめて萬澤を出づ、昨日の雨なごりなく晴れて、富士に雪降れり、馬おふもの、お山に雪降れば、久しく雨降らずといへば、又人、富士に雪降りて、晴れずといふ事なしといふ、げに一むらの雲も見えず、山の姿うつくしく、繪に書きたるによく似たり、すべて海道より見るにはまされり、所の者のいへるは、富士は甲州の山と申し傳ふる、それがしいづかたも見候に、こなたおもてはまさりて候といふ、まことにいふ如くなり、れよそこのたびばかり、心よく見し事はおし、おもふ事いはまほしくやありけむ、

うつぶさにさのみはは

この世には心にかゝる雲もなし富士のたかねもあくまでに見つ

萬澤より二里ばかり來て、うつぶさといふ、前にいなせ川流れ、富士の雪をひたせり、さびしくをかしき處なり、うつぶさにさのみは人のねられ

日蓮上人の歌にて「うつぶさにさのみいへねられねばねられねば月をみのぶにおきかへるかな」

かしの木坂は箱根峠より東へ下る半腹にあり

こゆるぎ磯

ねばと、高祖の詠じ給ひしは、里の子もよくねばえて語る、

うつぶさにねられむものかかたしきのまくらの山はふじの白雪

松野の字佐美といふものゝ家に暫の休して、吉原に日高くつく、

九月一日、今日も富士の山を見つゝゆく、

未曙先知紅日昇、晨光相映雪峻嶒、當空唯見垂天翼、誰執白鷗論大鵬、

富士山高日本東、一峯直出太虛中、不知何代巨靈乎、擘却須彌墜碧空、

今宵は箱根の峠にとまりぬ、

二日、よべより雨いたく降りて、今朝もなほやまず、いさゝか晴間待つほどに、おそく出でたり、湖水の景、空濛としてをかし、

山上有湖水、一望洗客腸、雲鬟含雨色、天鏡變風光、當得塞翁意、何言西子粧、身來箱根頂、却似在餘杭、

かしの木坂こゆるとて、

磊落箱根坂、阪頭雨未晴、羊腸雲霧繞、馬迹水流生、不見眼前險、唯從心地平、草鞋雖染血、何以至傷情、

草鞋にて足やぶりたる事をいふなり、暮に及びて大磯につく、こゆるぎ

の磯をとへば、たゞこゝもとなりといふ、

箱根山今日こゆるぎの磯まくらあけぬ夜いかにわびつゝもねむ

とよみてねにけり、

三日、大磯を夜深く出でゝ、あくるころほひ相模川を渡る、藤澤のすこしてなた、風早といふ處より鎌倉に入る、片瀬といふ里の前に片瀬河あり、

風早相模高座郡なり

宗尊親王の「歸り來て又見む事もかたせ川濁れる水のすまぬ世なれば」

宗尊親王前に中務のみことあり

とよみ給ふは、此處なり、此歌高祖の御詠といふは、ひがことなり、

うきながらいとふならひやかたせ川たれも濁れる波をあげつゝ

歸り來て云々歌枕卷卷二十に中務親王とあり

龍の口には、則龍口寺といふ御寺あり、かの敷皮の跡とて、ちひさき堂あり、御影を安置せり、しばしねんずして後、そこら拜みありきて、

龍口當年虎口難、電光影裡泰山安、遺縱猶在晴沙上、一片秋霜日下寒、

江の島は、やがて龍の口に向ひて、海岸孤絶のところ、いと興あり、塩干のはゞにて、かちより渡る、島にハ漁人の家多くて、處せく魚をほしおきたれば、人皆鼻おほひて過ぐる、うへにのぼれば、下の宮、上の宮とて、天女の神躰まします、十町ばかりうしろにめぐりて、岩をつたひ、潮をわたりて

下の宮建永元年實朝公の本願とし

て慈悲上人良貞の開基たり

上の宮仁壽三年慈覺大師圓仁の草創といへり

つい松つぎ松の音便松明に同じ

申狀義經の歎訴にて東鑑四に出でたりし當寺の草案とはところ〴〵相違あり

草草稿の意

雪の下鶴が岡一の鳥居の前邊をいふ

ひきのやつ比企谷と書く頼朝卿の乳母比企尼其甥藤四郎

岩屋の中に入る、其中廣くはからにして、人住みぬべし、やゝ入りて僧に逢ふ、すなはち天女の出現し給へる岩屋なり、これより奥はつい松して入るなり、なにがし案内せむといへど、下の寺に母を置きたれば、心もとなく歸りぬ、腰越の萬福寺にゆきて、申狀の草を見る、辨慶の筆なりといふ、寺の庭に硯の池といふあり、此水にて書ける故なりとぞ、

西塔强梁獨出群、更將筆硯助源君、到頭文武俱無用、只合終身臥白雲、

今宵は雪の下といふ處に宿りぬ、名ある處々多く見殘したる、わかずおぼえて、おもひつゞけし、

また來むとちぎりやれかむ假寢するかまくら山の草のまくらに

四日、ひきのやつにまうでゝ、高祖のみづから御睫（まつげ）うゑ給へるといふみかたち拜み、方丈に入りて、臨滅度時の大曼荼羅、其外もまた拜みぬ、長興山妙本寺といふはこれなり、富士の山にうち向ひて、いと興ある處なり、こよひは神奈川に着く、

五日、池上へまうでたるに、上人谷中へ出で給ふといへば、諸堂拜みて、やがて江戸へおもむきぬ、たそがれに日本橋のもとに着く、二階なる處に

義員を養ひて子とし此地に住めるよりいふ十六夜日記にしのび音にひきのやつなか時鳥雲井に高くいかなのらむとあり

みかたち妙本寺本堂の北に御影堂あり日蓮上人在世の時弟子日法の摸せる像なりとぞ

臨滅度時臨終末典の義なり

そこのやかた母堂は外に宿れるよしなり

しばち新發意得度の僧

月を見て、

日本橋邊日本秋、更無一事掛心頭、今宵新見江城月、影滿扶桑六十州、

せばき處になみ居て、つれ〴〵なるまゝに、からの、やまとの文、心々に見つゝ、はや幾日にかなりけむ、あるは詩作り歌よみて、心をやるかたもあり、母は六日のあしたより、そこのやかたにのみ居給へば、雲井のようにおもひやることゝちして、うしろめたく忘るゝ時なし、或夜しばちども、旅宿の月といふ事をよまむとてよめる、

千里までくまなきかげもたびごろも袖のみくもるむさしの〻月

うきながらむすびおれにし草まくらあくる夜をしき武藏野の月

月もまたことゝひかはせ隅田川みやこてひしき夜半のねざめに

此外もありしおぼえず、谷中の本法寺といふ寺にて、或人大乘寺の鐘の銘を所望せしに、いなみ難き事にて、やがて翌日これを草してつかはす、其銘ならびに序、

物之啓發、莫先乎音聲、所謂此方具教體也、音聲之中、又以鐘爲先、聞而至乎無聞者上也、發乎善心者次也、結乎勝緣者又又其次也、雖有親疎遠近

をいふ、

江戸を出で給ふ池上の上人の事なり

禹中己の時をいふ勾會に日在己日禹中とあり

其所以至之一也、武州大乘寺合諸檀之力、新於鐘而篆之、住持比丘日登請記年月證焉、余欲其勝緣不辭援筆即記、又爲之銘曰、

鑄銘新鐘　筍簴梵宮　優曉吼月　含霜喚風
寺住大乘　人證圓通　娑婆敎體　在此聲中

十三夜、ふけゆくまで月を見て、

はてしなき草のまくらのむさしのも月には秋のかぎりをぞ見る

廿一日、江戸を出で給ふやつがれは一日さきだちて池上へいきて、心しづかに法文など尋ねて、いたうふけて書院なる處に到りぬ、夜しづかに心すみて、しばし寢られねば、枕をさゝへて、

人世知音少、追師斯再尋、今宵池上月、依舊照天心、

うのあした、とく起きて、はるかに御骨堂を拜む、肉づきの御齒も此肉にあり、此齒のあらむ處は、我生身常にありとおもへとなむのたまへる、いとたふとし、日すでに禹中になりぬ、いつ又對面給はらむとも知らず、あかず歸り見がちにて出づるに、空うち曇りて、雨すこし降り出でたり、人々こもやうの物もとめて雨よそひす、されどやがて晴れぬれば、皆ぬぎ

何の橋平塚と大磯の間に花水橋あり これなるべし左右田畑にて見あぐれば富士の高嶺高麗寺山の肩にかゝりて景色をかしき處なり

玉澤伊豆田方郡なり此地に妙法華經寺とて六老僧の一人なる日昭開基の寺あり

おもの御膳といふに同じ

すてつ、六郷の橋の下にて、馬の水かはせけるに、母の御こし來れり、こよひ戸塚にて待たむと契りしに、おもひかけずうれし、

飲馬橋邊望母時、肩輿轆々忽過來、不須徒作尾生約、天性相逢也是奇、

廿二日、何の橋とかいふを渡りて、大磯にかゝる、このわたり見處多し、大磯にておものまゐらす、蠅多くて物のあやめも見えず、いぶせき事になむ、

空鉢持來休大磯、西山可采數莖薇、何緣爲母進甘毳、脫粟飯中蠅亂飛、

暮れて小田原に着く、なにがしとやらむのとまりにて、いと處せく、ちひさき家に臥しぬ、

廿三日、夜のほの〴〵とあくるに小田原を出でゝ、伊豆の玉澤へまうでゝ、たそがれのころ、三島に着く、風のこゝちにて頭痛く、物くはで何の興もなし、

廿四日、曉寒く霜おきて、いたうひやゝかなれば、日やう〳〵のぼりて宿を出づ、富士の山、日ぐらしに見て、

天鍾袖秀海之東、萬仞高崒歷岱宗、根跨三州烟樹老、嶺分八葉雪花重、才

湯川駿河盧原郡なり由比とも書く

星をかざして云々夜をてめて旅行の体なり褚戴詩に簪星曳月下蓬壺とあり

方壺東海仙山の名なり

薩埵山これも盧原郡あり もとは海路にあらざ

衰難續都生記、身病何尋役氏蹤、唯有浮雲變遷去、巍然不改舊時容、

田子の浦、目もあやあり、はる〳〵と見わたして、

富士のねの雪のながめもわすれ貝わするばかりの田子の浦なみ

或人のいはく、多胡の浦は、奥津の事なるべしと、されどいざよひの記に富士川を渡りて、多胡の浦にうち出で、伊豆の國府に至ると書けり、すべてこのわたりを田子の浦とも田子の入海ともいふあり、

廿五日、曉近く湯井を出でゝ、星をかざしに月をおびてゆく、方壺をくだりけむこゝちぞする、朝日のほのめくころ、薩埵山に至る、此山いづれの菩薩の跡たれ給へば、かく名けけむと、こゝろみに馬の口とれるをのこに問ふ、いづれの時にか、地藏菩薩の、海より、あがらせ給へるを、こゝにあがめ奉りしに、靈驗あらたにして、今に信向の違絶えず、別當などもあり、常には拜み候ふ事ならず、近年六十餘年を經て、たまく開帳ありしかども、たゞ七日がほどなりといふ、此男さかしきものにて、何くれとよく語れど、さのみはくだ〳〵しさては其故の名にてありけり、

於皇薩埵、昔泛波來、愍此常沒、長留海涯、山頭杲日安詳出、過了晨朝起定

しかど明暦元年韓客來朝の時佐野藤吉次佐野久綱に命じて今の道を開かしむといふ

あま人も云々伊勢物語にあまのかるもに住むと虫の我からと音をこそなかめ世をば恨みじ

うつの山云々千載集に都にはまだ青葉にて見しかどもみぢちりしく白川の關

時、

おきつの濱のあたりにて、あまの鹽やく業を見て、

あま人もおきつもに住むわれからやからき世すぐる浦の鹽がま

清見寺を過ぐるとて、一日作りし詩をおもひ出でぬ、

東關壯觀此鍾奇、美穂松原清見崎、沙鳥遠分洲渚翥、風帆高載夕陽飛、波間煙景親王詠、海上白雲僊女衣、一過巨麓山上望、三山佳境不容歸、

宇津の山にて、いつしか蔦の紅葉したるを見て、月日のはやく過ぎゆくさま、何となく驚かれて、

うつの山まだ青葉にて見しものを蔦のもみぢは夢かとぞおもふ

こよひは藤枝にとまりぬ、

廿六日、佐夜の中山を越ゆとて、

佐夜中山興最多、朗吟圓位上人歌、殘生何思復應越、身世脛於霜露脛、

今朝夜をこめて出でぬれば、袋井に日高くつく、

廿七日、濱松をすぎゆく、

はままつのつれなきいろも秋はなほ涙と風とのこゑぞさびしき

濱風ひきありきて俗に風を引くといふ意源氏明石の巻にこのものかのもの柴ふる人どもすゞろはしくて濱風をひきありく云々

澂澈水のきら〳〵と光るさまをいふ

練禪師東福海藏院主康永元年南朝後村上より國師號を賜ふ貞和二年七月身まかりぬ元享釋書の作者なり

歌枕能因の歌枕顯昭の

をりしも風あれ、浪の音高く、雨さへ降り出でぬ、風のこゝちいまだよかちぬに、又濱風ひきありきて、母の心いかで休めむと、いとわびし、あら井のわたりを越すほど、すこし晴間あり、湖水の面澂澈としてよし、左海右湖同一碧、長虹并飲、兩波瀾と、錬禪師の作りしは、此處なり、はまなの橋、いづこのほどならむ、

ながめやるかたは濱名の雨の日にそをだにわたせ虹のかけはし

おきつなみ塩風こしてはるゝ〳〵ととはつゐふみの秋のみづうみ

くれかゝりて白須賀につく、歌枕に白菅とあるは、これなるべし、三河の志賀須香も歌枕には然曾と書けり、佐夜の中山を長山と書ける類なり、假名がきには萬葉集にも此類のみゞ多き、されど歌にはしらすげとよめるにや、宿の庭に菊紅葉などのあるを見て、

三諦無形強立言、空中非獨不看痕、白菅亦是假名字、來入黃花紅葉村、

輔行の中に三諦無形俱不可見といひ、心性不動假立中名などある事をおもひ出でゝいへり、

廿八日、岡崎に、

歌枕などは皆諸國名所を記して古歌を集めたり沙門澄月の編にて歌枕名寄てふもあり

輔行天臺の智者大師法華經の觀心を述べられしを摩訶止觀といふ妙樂大師其註を記されたりこれを止觀輔行傳弘決といふ十卷あり

紙子紙にて製りたる衣なり奥州刈田郡駿州安倍郡より出すものを上品とす

廿九日名古屋につく、そのあくる日、元贊急に書を寄す、紙子に詩を添へておくる

別後瞻望如念親、寄君紙被不慚貧、心爲昔日獻芹客、志是三年刻楮人、朗老溪居常送夏、放翁夜坐自生春、莫嫌片々輕還薄、肩重千山萬水身、

十月一日に勝野のなにがしのもとにて、元贊に逢ふ、其家のさま、いとおもしろし、庭に山作り、奇石怪松、心とまらずしもあらず、元贊まづ詩作る、

排闥堆藍勢可捫、巨靈縮地列瑤崐、蘭葱互擁支離叟、礹碡遙分富士孫、樹色籠陰來野色、苔根疊翠綉雲根、歸然巧貯神仙窟、好景長教不出門、

予が詩に、

茅山松、仇池石、子雲亭、右軍筆、一簣心匠高、屑碎眼底迫、處世世與忘、接物々自適、黃葉日々新、著苔年々碧、

八景をうつせる屏風あり、これを題にて作らむといひて、元贊

水墨傳神筆、丹青布景書、盡道仇池好、疇知楚水餘、衡陽初斷信、鄂渚莫遲濡、暗泣湘妃淚、清輝鮫客珠、蘭葱山舍霤、縞帶雪縈紆、寶刹浦牢吼、腥風晒網疎、輔川何足異、道子豈能殊、髣髴江山態、郭熙力不如、華堂羅衆客、注目

在庭除、

予も二首作る、

袖濕湘江客、君山月亦孤、沙頭數行字、浦口一竿旗、酒醒晴嵐午、網晞落日晡、昏鐘何處寺、唯看雪模糊、

煙水茫々映夕暉、雁鳴寒雨雪霏々、昏鐘迎月市人散、風送片帆歸不歸、

元贊此結句をかへすがへすして、八景包涵意盡景省鍛錬老成と書けり、

明日たゝむといふ日の夕つかた、元贊送行の詩、あらびに書簡、おくり物もあり、書簡は文をげければ、こゝにのせず、其詩二首、

政公奉母眺東天、飯路西天雁字聯、屐底雲霞探欲遍、杖頭風月賦無邊、鎌倉古蹟閑憑弔、江戸雄關暢覽躔、最羨稲裝吟句重、馬耿不動慢加鞭、

龍華會上大金仙、飛錫東遊亦夙緣、道果證成霜菓候、法華開作菊花天、多川便是恒河水、富士何如鷲嶺遙、遙望寶雲舊隱、松枝西向報師旋、

返簡もこゝにはのせず、和韵は、

坐了春風小雪天、清談佳句共蟬聯、道窮鄒魯明朝裏、迹遍江山日本邊、曾寓菊亭尋國史、今飯松氏踏星躔、可憐別後、蹇驢上、回首倒騎情著鞭、

上國觀光逢謫仙、俱吟風月舊因緣、童年折桂南京地、蚤歳浮桴東海天、千首遙流九州外、五雲高掛士峰巔、共君欲去林丘下、人世本如磨蟻旋、

此詩の中に五雲高掛士峰巔とは、元贊玉霄宮といふ富士の額かける事をいへり、

四日、名古屋をたつ、稲葉萩原などいふ處を過ぎて、大垣に至る、

さとの名のいなばかりはす秋すぎてすゝめさびしき小田の朝霜

をしかねし野べの萩はら霜がれてあだなる露のかたみだになし

五日、關が原をゆくに、あやしき家のひさしなど、木の葉ふりうづみたるに、をりしも時雨うちそゝぎて、おいれに物さびし、

むらしぐれうれだにもらぬ板ひさし不破の關屋は落葉のみして

(身延道の記をはり)